

特集

東北の自然と文化

—東北からの発信

初澤敏生

東日本大震災後2回目となるJSA東北地区シンポジウム(2013年10月5,6日開催)では「東北の自然と地域文化」がテーマとして設定された。震災からの復興が進まず、原発事故も収束しないなかで、なぜ「自然と地域文化」というテーマが設定されたのか。それは、震災復興にあたって文化の継承が不可欠であるからである。

文化は地域の自然や歴史、社会の結びつきのうえに成り立っている。地域を復興させるために、住居などの生活手段や仕事などの確保が重要であることは言をまたない。しかし、人びとがそれまでに作り上げてきた歴史や社会、それらを成り立たせてきた自然を失ったままでは、本当の意味での生活を再建することはできない。

ただし、それだけに文化の復興は難しい。各地でさまざまな支援が行われているものの、すでに多くの地域文化が失われてしまっている。筆者は、その理由の一つに研究者の文化研究の層の薄さと、それにとまなう支援の少なさがあると考えている。

文化は地域のさまざまな要因の総合的な結びつきの上に形成されている。そのため、それを研究するためには学際的な視点から進めていかなければならない。しかし、現在の研究界ではそのような研究は進めにくく、研究の蓄積も薄い。このような状況が復興支援の足かせになってしまっているのである。文化の復興を進めるにあたっては、研究分野や学会の垣根を越えて協同的に研究することが必要であり、日本科学者会議が果たすべき役割は大きい。筆者は今回のシンポジウムが、文

化研究の重要性を再認識し、文化の復興を進めるための契機となることを期待している。

なお、文化研究は震災復興だけを目的としたものではない。地域づくり、まちづくりを進めるうえでも、これらの研究は有効な支援を生み出すことができる。

本号の「巻頭言」で栗野氏が東北の自然と文化について語る意義を述べているが、それと関連して、本特集では4本の論考が掲載されている。草刈氏と金野氏は山形県小国町の熊鷹を事例に、伝統的な熊鷹の今日的意義とその継承について報告している。また、栗野氏は米沢を事例として歴史とまちづくりとの関係を明らかにし、その保全の必要性を指摘している。この2本の論文は、現在に受け継がれている歴史的な文化をとらえたうえで、それを後世に伝えていくことの意義を明らかにしている。

また、白石氏は大潟ジオパークを例に、ジオパークによる地域づくりが地域の文化を継承し、人びとがローカルな世界で生きることを可能にする方向を目指していることを指摘している。梶原氏は自身が行っている岩手県の水産・養殖業の復旧活動を示したうえで、なお、地域への愛着を生み出す社会制度や活動の重要性を指摘している。これらの研究は、地域にとって文化がいかに重要なものであるかを明らかにしている。

被災地の復興や地域づくりの支援のためにも文化研究の深化が必要である。今回のシンポジウムがその第一歩となることを望む。

(はつざわ・としお：福島大学、地理学)